
喫茶店

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶店

【著者名】

NO685A

長月 タ子

【あらすじ】

喫茶店にまつわる、僕と君のお話。

夕日の中からその少年は現れた。

野球帽のつばを田深にし、肩をそびやかし、20センチに満たない靴で道の小石を片つ端から、蹴っていた。

僕はそれを、ガラス窓に映る、映画のワンシーンのようにつつめていた。視線を感じたのか、少年は立ち止まってこちらを見た。僕はこの喫茶店の、いすの背もたれに寄りかかりながら、コーヒーを軽く持ち上げて

「飲む？」と、唇だけで言つた。

少年はそのまま僕をじっと見ていたけど、やがてこちらに向かって歩いてきた。喫茶店のドアが開く音がする。少年は黙つて僕の向かいに腰掛ける。

「マスター、ホットミルク。」

僕は彼の飲み物を注文する。やがて温かそうなマグカップが運ばれてくる。目の前にコップが置かれても、君は田を上げようとしない。砂糖をティースプーンで正確に2杯、僕はミルクに入れてかき回す。ホットミルクからやわらかい香りがたつ。

「疲れる時は、甘いものがいいよ。」

僕は君にミルクをすすめる。君はそつと両手でカップを持って、ほんの少し口に含む。

そのとき、はじめて君が笑顔を見せたのさ。もちろん、その瞳の奥の、暗い影は見逃せなかつたけど。

僕らはそうして、喫茶店で落ち合う事が日課になつた。君はいつも夕日の中から現れる。そして立ち止まる。僕は唇だけで声をかける。「飲む？」

そう、僕らはスパイだ。お互に重大な任務を抱えていて、何と

か遂行しようとする。けれどまくいかなくて、こうして言葉にならない思いを打ち明けるのだ。君は、ミルクに。僕は、コーヒーに。言葉を交わす事はないけれど、僕らはお互いの抱える重さだけは、解りあえる。だって僕らは同士だから。

街は相変わらず、夕日を迎える。とても暖かに。とても親密に。そして僕はそこで君を待つ。君が夕日の中から現れる。

けれど君は今日、帽子のつばをまっすぐにかぶっている。その足は地面をしつかりと受け止める。君は夕日を背負っちゃいない。右手には母親と、左手には父親と、君はしつかり手をつないでいる。瞳の影は消え、水晶のように透き通っている。僕はそんな君を見ている。君はその歩みを止めることなく、ちらりと僕を見る。僕はコ一ヒーカップを少し持ち上げる。君はわずかに微笑む。それは勝利の微笑だ。君は任務を成し遂げたのだ。

僕は誰もいない向かいの座席を見つめる。おめでとうと、唇だけで言つ。

うん、そうだ。僕も任務を決行するよ。君のようにならかっこよく決められるかわからぬけれど。

僕は立ち上がる。僕ははじめて立ち上がる。喫茶店のドアをしつかりと開ける。そこには大きな夕日があつて、僕を消し去ろうとしている。でも僕はひるまない。うん、そりだと僕はもう一度つぶやく。

「北村健」

これは僕の名前だ。そしてその名前が今、目の前にある。ある地方都市の、それなりにさかえた駅の一角にある古びた伝言板に、真新しい白でしつかりと書かれていた。

僕は黙つてその字を見つめていた。何でこんなところに僕の名前が？

いや、『北村健』だからといってすなわちそれが僕を指すということにはならない。何しろまあ、よくある名前なんだから。僕は短く首を振つて、その伝言板を後にした。

大体において僕はあまり、物事にとらわれない性質なのだ。

そういう僕の性格を見越してか、次の日もそれはそこにあった。掲示板の前で僕は立ち止まる。それは古代エジプトのピラミッドの文字みたいだ。文字であることはわかる。しかし意味がわからない。それはあまりにも時間がたちすぎているせいだ。2000年以上前の人たちの生活なんて見当もつかない。けれど、ここに書かれているのは古代エジプト文字じやない。黒板に書かれたのは僕の名前。

『北村健』『北村健』『北村健』『北村健』。

誰かが僕の頭のボタンを押した。ピンポン。

僕は人が行き交う駅の構内を走り出した。走る事なんて久しぶりだつたけど、足はちゃんと前へ進んだ。駅へ向かう人の群れを逆流する。何度か人とぶつかる。誰ともなくすみませんとつぶやく。

そして僕はたどり着く。忘れられたようにひつそりと佇む小さな喫茶店に。ドアに手をかける。その金属のノブの冷たさは5年前と少しも変わっていない。ぎつと音がしてドアが開く。僕の後ろから夕日が一直線に店の中を照らす。そして僕よりも先に僕の影が店に飛び込む。

「いらっしゃい」とマスターが少しも変わりなく言つ。

カウンター席の女がまぶしそうに振り向く。

「遅いぞ。北村健」

細いピアスがきらりと光つた。

「……杉野？」

「そうよ。きれいになつたでしょ？」そういうとこっと笑つた。笑

顔の中に15歳の少女がいた。

僕がカウンターの、杉野の隣に座ると、マスターはミルクティーをいれてくれた。15歳のころ、僕はコーヒーが飲めなくてよく杉野に馬鹿にされたものだった。

「北村健は、どうよ、調子は？」

「つて言づか、おまえ、駅の伝言板に、俺の名前書いだろ」

「おかげさまで思い出したでしょ？」

「まあ、そうだけど

「やっぱり忘れてたんだ。私なんでもう3日もマスターのところに通つちやつたよ」

「うちに電話してくれれば良かったのに」

「君んちの電話番号なんて知つてるわけないじゃない。それにね、私は君の友情を信じたの」

「それはどうも」

マスターがお代わりのコーヒーを杉野の前に置く。

「それじゃ再会を祝して、乾杯だな」マスターがカップを軽く持ち上げる。

「うん、乾杯。マスター。あの曲かけてよ。チアット・ベーカーで

マイ・ファニー・バレンタイン

やがて店内にけだるそうなメロディーがながれ始める。ミルクティーは甘すぎず、5年前と変わりない。

中学のころ、僕らはブラスバンド部だった。僕と杉野はサクソフォンを吹いていた。杉野は15歳のくせに生意氣にもジャズが好き

で、影響されやすい僕もすぐにはまつてしまつた。杉野の父親がこのジャズ好きなマスターと友達で、僕はよく、こここの喫茶店に連れてこられた。そしてマスターの貴重なコレクションを片つ端から聞いたのだ。マスターのおじりで。

「それじゃ、約束のこれをお返しします。」

杉野がカバンから取り出したのは、15歳の時僕が大事にしていたG-shockの時計だった。時計が僕の手に再び戻つた。それはあの時、ニュー・ヨークに突然引っ越してしまった杉野が餓別にと勝手に持つていつてしまつたものだ。二十歳になつたら返してあげるよといつ約束付きで。『あの喫茶店で待ち合わせにしない?』

「いいよ、あげるよ、これ」と、僕は言つ。

「約束だから返すよ、ちゃんと。次はコレクションついだい。無期限で」

「はあ?」

「ま、冗談だけど。さて、約束も果たした事だし。私はそろそろ帰るうつかな」

「え、もうかえんの?」

「うん、今日がタイムリミット。夜の便でニュー・ヨークに帰んなく

ちゃ

「一ヒーリーはマスターがおじつてくれた。ありがとう、マスター。今度はちゃんとお金払うよ。と口の中でつぶやく。ぶつぶつ。僕は駅のホームまで杉野を見送る事にした。今度は人の流れに乗つて、駅までゆっくりと歩く。杉野が僕の少し先を歩く。あのころと同じ。話し方も、歩き方も。そのたびにピアスが夕日を反射させる。きらきら。

予想に反して電車を待つ時間はなかつた。アナウンスが流れ、すぐに電車がホームにすべりこんでくる。杉野は何のためらいもなく

さつと電車に乗る。

「杉野、また、あの喫茶店で集合しない？」

「しない。片方しか覚えていない約束は、約束にもならないから」

「杉野」

「さよなら、北村健。元気でね」そういうと、杉野はいつものようににっこりと笑った。いつものように。それは5年前までは、確かに、いつものように。でも、今は。

電車のベルがなる。ドアを閉めますとアナウンスが言う。ドアが閉まる瞬間だつた。杉野が僕をじっと見た。僕も杉野を見た。

「北村君、私、ほんとはね……」

ドアが僕の目の前で完全に閉まる。杉野の言葉は途中から聞こえない。電車はゆっくりと動き出す。窓越しに杉野の唇が動いている。そうして電車は行つてしまつ。杉野と杉野の言葉を乗せて。

僕は夕暮れのホームに取り残される。杉野と過ごした数時間が泡のように消えてしまつたような気がする。あれは本当に現実だつたのだろうか。ポケットには時計の感触がする。僕はそれを握り締める。

改札を出ると、伝言板にまだ僕の名前が残つている。

『北村健』。僕はそこにかかれた本当の意味を探そうとする。

「北村君、私、ほんとはね……」

僕は伝言板の前で立ち尽くす。

郵便やさん、いつものよしに郵便物を届けに来る。今日もバイクの音が私の家の前で一回停まって、そして次の配達場所へ走つていいく。

私はがちゃがちゃとテレビのチャンネルを変えつづけていた手を止め、うだうだと玄関に向かつた。桜沢と書かれた表札の上に、桜が舞つている。郵便物は三通。DMと、請求書と、それから、手紙。手紙？

水色の封筒にはたどたどしいひらがなだけれど、しつかりと宛名が書いてあつた。しかし残念ながら、住所が違う。聞いたことのある地名なので、市内だろ？。「あやちゃんへ」か。私の口から笑みがこぼれた。「あやちゃん」はあつてるんだけどな。

封筒の裏を返すと「りょうた」とこれもまたしつかりと書いてあつた。名前だけ。うん、と私は思つた。この住所を尋ねてみようか。急いで玄関に入り、テレビを消して地図を広げた。その地名は家からそう遠くない事がわかつた。電車で五つ田くらい。私はすばやく支度を済ませ、春の暖かな口差しの中での小さな冒険を決行した。空には春が満ちていた。どこからか何かの花の匂いがする。

久しぶりに電車に乗る。昼下がり、乗客はほとんどいなかつた。私の向かいに座つているのは、楽しげな親子だ。母親は外を流れる景色を指差しながら、電車はやいねえと、語りかけ

男の子は母親の言葉を繰り返していた。あの手紙の差出人も、ひとつしたらこんな少年なのかもしれない。

電車は陽だまりの中を、規則正しい音を立てながら進んでいく。そのリズムの中に次の駅名を告げる声が、車内を滑つていった。さつきの男の子が駅名をつぶやくのが聞こえた。

降り立つた駅は、昼の口差しの中でぼんやりと眠そうだった。私は駅前のバスのロータリーで地図を広げ、行く先を定め、歩きはじ

めた。バスを使うほど遠くない。目立つ建物を目標にしながら、少しずつその住所を指す。

まず、銀行を見つけ、地図のとおりにたどり着けるとわかつてうれしかった。次はスーパー。この辺りは商店街でもあるので、夕方はきっとにぎわうのだろう。ゆつたりとした影が街路樹の下に広がる。地図って意外に使えるものだと感心した。少し丸く感じる風をほほに受けながら、小さな交差点を曲がった。目印も減ってきたので、ここからは電信柱の住所が頼りだ。何本かの電信柱を訪ねて、目的地らしい住所を確認した。うん、多分この辺だ。そうすると、この角を曲がると。

私は軽く深呼吸してその一步を踏み出す。

この角を曲がる。
けれどそこには、ただの駐車場だった。その土地を囲む四角の空を見上げた。空はまだ青かつた。

私は深く溜息をついた。呼吸は深呼吸にも溜息にもなるのだ。暖かい日差しは変わらず私の横顔を照らす。私は太陽を振り返る。その光が田の中で光線をはじけさせる一瞬、私は何かを見た。日の光をまっすぐに反射させていた、小さな喫茶店。違う。私が見たのは喫茶店だけじゃなくつて。

『あーやーちゃん』

黄色いかばんを肩から下げ、黄色い帽子をかぶつて、青いスマッグを着て喫茶店を背に立っていたのは『りょうじゅりん』。

もうかけらになってしまった記憶の断片が、喫茶店とともに浮かび上がってきた。

ああそうか。そうだった。この小さな喫茶店を眺めて過ごした小さな日々が、私の胸をたたいた。そつと手紙の封を切る。水色の便箋は優しく過去から語り掛ける。『ひつじしてもまたあそぼつね』それは間違いない、私に届いたのだ。

喫茶店のドアを押す。私はここへ来た事があつたろうか。窓際に

座る。マスターが言いつ。

「何になさいますか？」

「コーヒーを下さい」

これが、運命をつなぐ5分前の話。続く。

ぼくは絵を描く。それは単に趣味でしかない。これで食つてこう
なんて考えた事もないが、特に人生に対しても目標のないぼくは、一
般社会を横目で見ながら、絵を描く。

天気の良い日には公園に出かけ、そこで真っ白なキャンバスに向
かい合つているのが好きだ。別に公園の景色を描いている訳ではな
い。ただ、絵を描く。通りがかりの人が不信そうな顔をする。でも、
いいのだ。ぼくは絵を描く。

今日はまた妹が横にいる。時々毎日中から僕と一日公園で過ごす
妹は、まだ学生だ。まあ、だからと言つてぼくがそれをどうのこう
のといえる身分ではないのだが。

公園にいるとき、妹から出る言葉は疑問形ばかりだ。

「ねえ、今日の最高気温て何度？」

「ねえ、この字なんて読むの？」

「ねえ、眩しくない？」

「ねえ、何で学校辞めたの？」

妹はここにくる時、図書館から借りた小説をいくつも持つてくる。
小説から田を離さずに、つぶやくようにこれらの疑問を並べる。そ
の度、ぼくもヤンバスから田を離さずに、うんとか、ああとか、適
当な返事をする。けれど不意に何気なく、本当に聞きたい事を混ぜ
てみたりする。ぼくははつとして妹を見るのだが、至つてなんでも
ない風に鼻歌交じりに小説を読んでいる。

妹は小説に対しても感想を持つていらない。それこそ作家が
何十日、下手すると何年もかけて練り上げた作品を、なるほどねの
一言で済ますのだ。ぼくは作家という職業に少しばかり同情する。
なるほどねなるほどねなるほどね。3冊分の感想がたつた15文字。
空にはゆつたりと雲が流れていく。気持ちのよい午後だ。平日の
静かな昼下がり。絵を描くと言つより昼寝がしたい。なにしろぼく

が眠りについて3時間もたたないつむじ、無神経に部屋のドアをたきまくつた無法者がいたのだ。

「おにいちゃん、おはよう！」

そういうわけでぼくは久しぶりに午前中といつ時間に目覚め、せかされるままに公園にやつてきた。妹は手にとても重い小説の3部作を持っていた。なるほどね。

「ねえ、今日雨降らないよね」

「うん」

「ねえ、今何時？」

「2時」「うかな」

「ねえ、その女人だれ？」

「……」

妹は本を閉じてまっすぐにぼくの顔を見て言った。

「誰？」

ぼくが描いていた、女の顔をじっと見た。薄いブルーの背景に溶け込むような女の顔。さつきから鼻のあたりが上手くいかなくって、真剣に絵の具と格闘していたのだ。

「誰つて……」ぼくにもわからない。誰なのか？

「人間も描くんだね」

「そりゃ少しば学校でやつたしね」

「たまには私を描いてよ」

「気が向いたらね」

「彼女？」

「まさか」

その顔はぼくの頭の中から出てきたにしては、現実味がありすぎる。まるで田の前にして描いているように確信に満ちた線だった。

「なるほどね」

「なんだよ」

「本の感想だよ」

キャンバスの中にはあいまいな表情を浮かべたままの女がどうし

ようもなく立ち廻っていた。公園を流れる川に、夕日が反射し始めた。時計は3時をさそつとしている。

「小説つて夏の話が多いわね」妹はパタンと本を閉じた。

「すーーい、きれいな空」

微妙なグラデーションに染められていく空は、そのままキャンバスに貼り付けてしまいたいくらいだった。

「このまま切り取つてそこに貼つちゃえば?」おんなじ」と考えながらつて。

道具を片付けてキャンバスを抱え、僕らは公園を後にした。「口ヒーが飲みたい!」と妹が騒ぐので、近くの喫茶店に入る。ガラスのドアを日差しがまともに反射して、目に痛いくらいだった。「おごってね!」ドアを押すと同時に妹が言った。なるほどね。カウンター席についてふと窓を振り返つた。そこからまっすぐに西日が入つてきていた。明るい光に包まれた窓際の席に、女が一人座つていた。

その姿にぼくは射抜かれたように動けなくなる。心臓すら止まつてしまふくらいに。

「お兄ちゃん」

妹がぼくを呼ぶ。

「お兄ちゃん」

ぼくは抱えていたキャンバスを落とす。店内にがたんという音が響く。

「お兄ちゃん! あの人」

わかってるよ。わかってる。窓際の女と目が合つ。そして激しい記憶の渦が体を通りすぎる。

そこには髪を二つに結わいた、黄色いかばんと黄色い帽子と青いスマックを着た女の子が見える。彼女も立ち上がりつて僕を見る。手にはしつかりと水色の手紙を握つている。

なるほどね。妹と僕はほとんど同時につぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685a/>

喫茶店

2010年10月11日04時52分発行